

土門剛

土門剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。



TDKにみる「農工一体」への軌跡

「テケテケテケテケ ティーディーケー」

このコマースィヤル・ソング、ご存知だろうか。ティーディーケー、カセット・テープで有名なTDK株式会社のことだ。50歳以上の方なら、FM放送の音楽番組を録音するのに、お世話になった方は多いと思う。筆者も、その1人だ。

そのTDKが、秋田県にかほ市を企業城下町にしていることは、ひょんなことで知った。3月28日朝のNHKが報じた、このニュース。

TDKが市内にある3工場を来年3月末までに閉鎖し、全従業員約700人を、県内の他の9工場に配置転換する計画を進めている。TDK従業員が路頭に迷うことはないが、下請け工場の多くが、仕事を失って途方に暮れると、下請け工場に勤める従業員の声を伝えていた。

それはさておき、にかほ市にTDKの工場が3つもあり、それを支える下請け工場がいくつもあると知ってちょっと驚いた。TDKは、その昔、東京電気化学工業と呼ばれていた、創業の地は「東京・芝区（現港区）」、最初の工場が蒲田（大田区）にあったので、にかほ市に工場がい

戦前の企業経営者は、「農工一体」の理想をもって本当に地域を豊かにした

くつもあるとは思えなかったからだ。にかほ市は昔の呼び方なら、旧由利郡仁賀保町だ。秋田には取材で足繁く通ったが、この地へ足を運ぶことは極めて稀だ。羽越本線を使つて秋田と酒田（山形県）を往き来する時ぐらいいしか通過することもない。

にかほ市とTDKの結びつきは、創業者、齋藤憲三（1898-1970）が、この地の出身地であるという縁によるものだ。齋藤が、戦前に「農工一体」という理想を掲げ、それを実現する場として故郷を舞台にしたことは、テレビを見て初めて知った。理想に燃え、東北の日本海側の寒村をハイテク産業の企業城下町にした齋藤という人物について俄然興味が沸いてきた。

齋藤憲三についての資料が少ない。出版物では「齋藤憲三の生涯」（川原衛門）があるぐらいだ。財団法人齋藤憲三顕彰会の出版とある。郷土の偉勲を称える組織だ。Amazonで買い求めようと思ったが、古本でも10万円の値札がついていたので諦めた。TDKや、にかほ市役

所のホームページ（以下、にかほHP）、秋田ふるさとづくり研究所の『ふるさと呑風便 第216号』（以下、呑風便）に、いくつかの情報があつた。これを参考に齋藤の「農工一体」の今日の意味を考えてみたい。

「農家を豊かにしたい」という使命感

齋藤家は、「代々旗本仁賀保家を支える重鎮の家」で、家老格の重職に就いていたということだ。父も祖父も、農業や農村改革に心血を注いだという記録があり、父宇一郎は「農聖」と呼ばれ、地元では農民より人望を集め、呑風便は次のような業績を伝えている。

「22年には衆議院に初当選を果たし、以来八期、25年に地域の強い要望で平沢町長になる迄の23年に亘る代議士生活の間に、米穀法、米価調節法、農業組合の立ち起こしその他、数々の農村振興、農村救済に関する法案の推進に常に重要な役割を果たした。宇一郎は農業の神様として齋藤神社に祀られ、今尚地域の人達の

深い尊敬を集めている」

そのDNAを受け継いだ齋藤が早稲田大学商学部を卒業するのは、第一次大戦後の戦後恐慌に見舞われていた22年のことだ。その翌年には関東大震災が起きる。卒業後は東京で就職せず故郷に戻った。父親から借金をして炭焼き事業を始めるためだ。

炭焼き事業の資金は、父宇一郎が出してくれた。「農村不況の原因はコメ作一つに頼る単純農法にある。だから、有利な副業こそ、その解決の決め手だ」と、父を説得した。これに理解を示した宇一郎は、事業資金として3千円を出した。今なら3千万円ほどの値打ちか。

「最初は自分の家の広大な山林の無尽蔵の雑木で炭作りをしようとする事業に打ち込んだが、その業務に熟達した人を得る事が出来ず、その結果は粗悪品の返品が山をなし、1年足らずで失敗。次に目をつけたのは寒さで材質が硬く下駄材として珍重される秋田の桐材の売り込み。これは1回目は成功したが、何百本もの桐材を次々に買い集める事は困難でこれも失敗。秋田米の売り込みも、養豚、養鶏も長続きさせる事が出来ず全て失敗し、2年足らずで資金3千円はパー。幼少から金銭で苦労した事のない『名家の三男坊』の或いは当然の結末とも言う結果に終わっ

てしまう。しかし『最初からうまくゆくなんて思わない。いい経験になったんだ。めげずに頑張れ!』と父親に励まされ、憲三が心機一転して上京したのは、関東大震災翌年の24年のことだった」(呑風便)

地元での事業にことごとく失敗した齋藤が、初めて職に就くのは、当時、設立されたばかりの産業組合中央金庫(現 農林中央金庫)だった。配属されたのは、東京の本店貸付係。貸付の仕事を通じて農家の生活改善の必要性をあらためて痛感する。この時の体験が「農工一体」の考えにつながっていく。

「憲三がその貸付係として勤務していた時に感じたのは、東北の農村の貧しさでした。後の彼の述懐によれば、『農家に対する資金の大半は首都圏に行ってしまう。これは東北の農家が貧しいためであり、担保となるべきものが無いからである。このままでは東北の農家は貧乏の域を脱し得ない』と、ひしひしと感じたといえます」(にかほHP)

戦後恐慌は、貧しい東北農村をさらに窮乏させた。その農家を救済すべく齋藤はまた行動を起こす。せっかく職に就いた産業組合中央金庫を5年で辞めてしまう。「農村に事業を起こして、農家を救いたい」と周囲を説得してアンゴラ兎の飼育を始

めると言い出した。最初は東京武蔵野町吉祥寺(現武蔵野市)に新築した自宅で飼育を始めた。

「自宅に5百坪のアンゴラ兎飼育場を作り、2百頭の兎を抱えて『アンゴラ兎興農社』を創設。農村副業奨励を目指してアンゴラ兎の事業化に乗り出した。農業の副業にアンゴラ兎がどれ程良いか、憲三の書いた記事は秋田魁新報にも載り、秋田でも大きな話題となった。2年後の32年には神奈川県中央林間に場所を移し、『東京アンゴラ兎毛株式会社』を創立し、更に大きな希望をもって事業に励んだのだが、その兎毛の売り込み先が思うように進まない」(呑風便)

ピンチに見舞われも、齋藤は決して挫けない。彼の真骨頂は、会ったこともない鐘紡社長を直接アタックする挙に出る。鐘紡は当時、毛織物会社最大手で、わが国を代表する超優良企業だった。現代なら、さしずめトヨタ自動車みたいな存在感があった。当時の社長は津田信吾。武藤三治と並んで鐘紡中興の祖と呼ばれている。もちろんコネを使つての面会だった。

「津田信吾鐘紡社長の慶応時代の同級生だった二人の紹介状のおかげか門前払いはいれ、辛くも数分間の面接時間を獲得出来ただけの憲三だっ

たのだが、憲三の、採算も考えずに理想に向かって邁進する純粋さに心打たれた津田社長は、結局、一時間半にもわたり充分にアンゴラ兎毛の説明を聴取し、その全量買付けを約束してくれたばかりか、東京アンゴラ兎毛KKに3万円の増資までもしてくれたのだ。この日のこの二人の出会い、正に運命的な出会いであったと言ふほかない。何故なら、こうした出会いが無かつたら、フェライト事業は間違いなく日の目を見る事は出来なかつたらろうから(呑風便)

これを読んでふと脳裏をよぎったのは、農水省が新年度に創設した「農林漁業成長産業化ファンド(仮称)」である。創設目的について、「農林漁業の成長産業化を実現させるため、官民共同のファンドを創設し、成長資本の提供と併せてハンズオン支援(経営支援)の充実を一体的に実施します」(農水省)というが、筆者は、このファンドの先行きは必ずしも楽観視していない。問題点がいくつもあるからだ。誰が出資先を決めるのか。出資先の選定に目利き能力はあるか。かりに損失を出した場合の責任は誰が取るのか。官民共同だけに連帯責任は無責任という結果になりはしないかと心配しているのである。

齋藤の飛び込み営業で、鐘紡との

士門 辛聞

札100枚をプレゼントして励ましてくれたのだった。
10円札100

取引は成立した。東京から30kmほど離れた神奈川県大和市中央林間に飼育場も作った。これで事業が大きく成長すると喜んだ矢先に、齋藤は絶命のピンチに見舞われる。飼育場の兎が、「コクシジウム」という寄生虫病に罹り、半分以上を死なせてしまったのである。その経験から齋藤は、こう総括してアンゴラ兎の飼育事業から足を洗う決心をした。

「農家を豊かにしたい。しかし生き物相手の副業では伝染病のある限り安定永続は望み得ない。安定永続の副業は無い筈はないのだから、とにかくその発見から出直しをしよう」(呑風便)

その報告にまず鐘紡の津田社長を訪ねた。津田に叱責されると思ったら、反対に激励されたのだ。

「成る程、その気持ちは分かる。実は今の紡績業の在り方についてもこのままで果たして明日は在るのか、抜本的見直しが必要ではないかと会社の中でも今論議が始まっているんだ。私もこの問題に真剣に取り組むから、君もさっと何かを掴め。これはその軍資金だよ」(呑風便)と10円

枚、千円だ。当時は、大卒の新入社員が1千500円だった。昔は、こんな経営者がいっぱいいた。

理想や使命感のない 農商工連携

それが齋藤にとって大きな転機となる。アンゴラ事業撤退の報告を亡父・宇一郎の同志である清瀬一郎弁護士に訪ねた時のことだ。清瀬弁護士は、東京軍事裁判の特別弁護士として活躍、衆議院議長も歴任した政治家でもある。その事務所に先客としていた長谷と名乗る弁護士から、東京工業大学助手の小泉勝永を紹介された。小泉は、初対面の齋藤にこう言い放った。

「貴方も資本金と労働力があれば企業は成立すると考えているようだが、それはとんでもない事だ。最大の資本は金ではなくて頭脳の力なのだ。今の日本に求められているのは、この『頭脳という資本』を大切に生きて、学者が発明したものをそっくり活かすような事業家なのです」(呑風便)

これがネットワークを拡げる。小泉から加藤与五郎教授を紹介され、フェライトの可能性を聞かされた。フェライトとは、鉄の酸化物を含んだ結晶体の集まりで出来た磁性材料のことだ。齋藤は、これは「当たる」

と直感したのだ。フェライトの特許権を持っていた加藤教授は、無償譲渡を条件に特許を譲ってくれた。

事業化に先立つのは資金である。加藤教授は最低でも10万円は必要だと説明していた。相次ぐ事業の失敗により、資本金の2万円を捻出するのが精一杯だった。そこで再び津田を頼った。東京の蒲田に320坪ほどの工場と事務所を完成したのは、37年のことだった。太平洋戦争の4年前のことだ。社名の「東京電気化学工業」も、恩を受けた東京工業大学電気化学科にちなんでつけた。

事業はすぐに軌道に乗った。海軍や陸軍から大量の注文が入ったのだ。フェライトは無線機に欠かせぬパーツだ。当時の陸軍は、無線機が普及しておらず、注文は大量に入ってきた。ところが当時の東京は、電力需要に供給が追いつかなかった。そこで齋藤は増産のため工場を故郷・秋田に建設する決断を下す。40年、実家である仁賀保町平沢にあって改造し、TDK平沢工場としたのである。

齋藤には先見の明があった。日米開戦となった場合、首都東京は必ず空襲を受けるであろうと想定して、工場そのものを故郷に疎開させることにした。これだと若い頃からの理

想も実現できると考えたのだ。

「工場を地方に造ることによって、農家の次男3男を雇い、職を創設し、農村の疲弊を救おうと考えていました。彼はこれを『農工一体』と称して地域の為に推し進めようとした」(にかほHP)

齋藤の予感的中した。蒲田工場が45年4月の空襲で焼失したのである。戦後は、その平沢工場がTDKを支えた。

「農工一体」今風なら「農商工連携」とか「六次産業化」と呼ぶのだろうか。でも「農工一体」とは、似て非なるものである。先に説明した「農林漁業成長産業化ファンド(仮称)」は、それらを資金面で支えるものである。「農商工連携」は、農業や商業や工業が連携すれば、何某かのメリットがあると漠然と思わせるだけで、「六次産業化」も、生産(一次)に、加工(二次)や流通・観光(三次)に取り組めば、農家の生活はよくなるという説明のようだが、満足に生産もできない者に、二次も三次もないはずだ。そこには齋藤のような理想や使命感の微塵も感じられないばかりか、鐘紡社長の津田のような資金を提供したり、リスクを取る人物が皆無であるということだ。

齋藤や津田が、この「農商工連携」を知れば、何と言うだろうか。